

球音再会
高校野球 2020夏

高校球児たちの夢の舞台、夏の甲子園の中止が決まった5月20日。一昨年の北海道胆振東部地震の被災地、むかわ町では、鷓川高校の野球部員39人が寮のテレビ前に集まり、発表の瞬間を静かに見つめていた。

「本当になくなったのか」。副主将の西村天辰選手(3年)は言葉がうまく出てこなかった。普段はにぎやかな夕食の時間も会話がなく、空気が重かった。「とにかくやりきろう。何か得られるかもしれないから」。頭の中にはその一言だけが浮かんだ。夕食を終えると自然と自主練習の準備に動いていた。

誰が声をかけたわけではないのに、3年生10人全員が集まり、練習に打ち込み始めた。誰も言葉を交わさなかった。

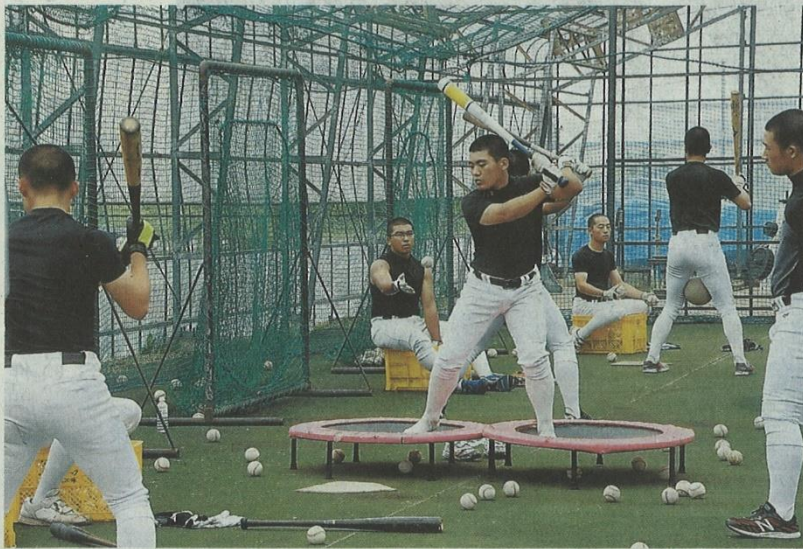
◎ ◎ ◎

今年、町の人たちに3年間の感謝を伝える夏にするは

全力プレー 3年間の感謝

鷓川

地震・コロナ…いつも町民が支えてくれた



バッティング練習をする鷓川の3年生たち。最後の夏へ力が入る=むかわ町

ずだった。

2年前の地震では、震度6強の揺れで部員が暮らす寮が被災した。仮設寮が完成するまでの間、避難所での生活を経験した。被災から2カ月間はボールを握らず、ボランテニアとして町の復興に汗を流した。阿部将希主将(3年)は町ですれ違ふ人からの「頑張れよ」という言葉に支えられたという。「自分もつらいはずなのに温かく応援してくれて、感謝しかない」と思い続けている。

鷓川は昨年の夏、10年ぶり

に地区予選を突破し、南北海道大会に出場。今年も「甲子園で勝つチーム」をスローガンに掲げていた。新型コロナウイルスによる影響で約2カ月間、寮は使えなくなり、部員たちは地元への帰省を余儀なくされた。それでも5月中旬に寮に戻ってからは、甲子園への道を信じて自主練習を繰り返してきた。

中止が決まった翌朝、3年生だけでミーティングを開いた。新たなスローガンを考えようとしたが、決められなかった。鬼海将一監督(26)には「どうしても目標が決められない」と報告した。

「甲子園にふさわしいチームになりたい」「町民に野球をする姿勢を見せたい」。部員たちはそれぞれの思いを、言葉にしてぶつけ合った。チーム全員で前を向いていこうと決めた。

6月1日に練習が再開されると、グラウンドには全力で声を出して練習する部員たちの姿があった。鬼海監督は、気持ちを切り替え、いつも以上に

上にはつらつと動く生徒たちに驚いた。「あんな楽しそうな姿を見たことがなかった。地震を経験して本当に強くなった」と話す。

新たな目標に向かう部員たちを町も応援している。「3密」の環境をつくらぬように、町営球場を無料で貸し出した。「頑張れ。コロナに負けるな」という、町民からの励ましの声が届く。

夏季大会は無観客で行われる。阿部主将は「プレーを町民の方に見てもらいたかった」と残念がる。それでも、「コロナで野球をできる喜び、一球一球の大切さを改めて感じた。全力プレーで3年間の感謝を示したい」と前を向く。

◇ (原田達矢)

夏の甲子園への道が開きかけた今年の夏。道内では道高野連主催の夏季北海道大会が11日から始まる。休校が長引きましたが、各校のグラウンドには久しぶりに球音が響き始めた。異例の夏と向き合う選手たちの姿を追った。